■初めてじゃない同士の初めての話

スコルピオス殿下の仕事は多い。武功で名を挙げた人だから、民の中には外で戦っているばかりだと思っている人もいるけど実際にはそんなことない。

第一王子の肩書は無くともそれなりの身分と立場なんだから書類仕事だって相応にこなしている。

さらにこの人は公務だけではなく、こそこそと裏でも暗躍しているから、その分の仕事も追加。合わせるとかなりの量だ。

当然、その補佐をしているオレの仕事もそれなりに多くなる。まぁ、表の仕事にしろ裏の仕事にしろ、やることはほとんど変わらない。重要なのは根回しと下準備だ。仕事というよりは作業であり、一日中同じことをしているとたまには気分転換もしたくなる。ちょっとだけ執務室を抜け出して散歩するのは既に日課のようなものだった。もちろん逃亡先は毎回変えていたから、武官に汗を拭くための布を差し出す女官が目に入ったのはただの偶然。幸せそうに微笑みあう二人を見ていいなぁと思ってしまったこと自体は、誰にも責められる謂れはないだろう。

良くなかったのはそれを口に出してしまったことだ。

余計なことは見ざる聞かざる言わざる。

奴隷時代に染み付いた習慣はいまだ消えていない。だからそれは警戒すべき相手はいないと確信していたからこその失態だと言える。

「――ほう、あれが羨ましいのかオリオン」

「っ!?　……スコルピオス殿下、いつからいらっしゃったんですか？」

「貴様が間抜け面を晒して、そこの廊下に現れた時からだ」

「…つまり最初からってことですね」

情けなくて肩も落ちるってもんだ。気配を消すのが上手くてイヤになる。

「質問に答えてないぞオリオン」

「あー、はいはい。羨ましいですよ。相思相愛。オレもあんな風に恋人同士みたいなことしてみたいなぁー」

「そうか」

頭の後ろで腕を組みながら半ば投げやりに答えると、殿下は軽く頷いて返し、それ以上は何も言わずに城の中に戻って行ってしまった。

『あんたのことが好きになった。そういう意味で』

とオレの気持ちは伝えてある。

気になってしまうのはただの同情。可哀想で放っておけないだけ。そんなところから始まった想いだから見返りを望むつもりなんてなかった。

殿下が欲しいものは一つだけ。オレはそれじゃない。

身の程は弁えているから黙って殿下の望む通りの駒に徹すると決めていた。それなのに隠す間もなく暴いてしまったのはスコルピオス殿下自身だ。

オレが気持ちを自覚したその日に自分を見る目つきが変わったと問い詰められ、白状させられた。複雑な生い立ちを持つ人だから自分に向けられる視線には人一倍敏感なのかもしれない。

あの時の殿下は仕事中に急に立ち上がったと思ったら、正面から剣を突きつけてきてマジで怖かったなぁ。

変化には敏感でも、その理由にまでは思い至らないのがある意味殿下らしい。

どうにか逃げ道が無いか考えてみたけど、オレの心変わりが事実である以上、どんな嘘も誤魔化しも通用しそうになかった。

何より、「お前も裏切るのか」と真っ直ぐオレを見据えた目が、なぜか酷く傷ついているように見えて、本当のことを言う以外の選択肢が思いつかなかった。

側仕えを外される覚悟の告白だったのに殿下は一言「そうか」だけ言うと、剣を収めてそのまま机に戻り、何事も無かったかのように仕事を再開してしまった。

誤解は無事に解けたみたいだけど、なんだか肩透かしを喰らった気分になる。

なんだそのあっさりした反応。しかも返事は無しときた。

数日悩んでから思い切って殿下に聞いてみたら、どうやらあれは応諾のつもりだったらしい。つまり「私も同じ気持ちだ」の意味。常々わかりにくい人物だと思っていたが、さすがに言葉が足りなさすぎるだろう。

それでも喜びは不満を補ってなお余りあった。好きだと伝えて自分もだと返された。すなわち、その日からオレたちは秘密の恋人同士になったのだ。

＊　＊　＊

そしてその夜。女官伝いに受け取った「来い」という飾り気のない命令。何だろうと思いながら殿下の部屋を訪ねると、中に足を踏み入れた途端に寝台へ放り投げられた。

敷かれている布はサラサラとしていて触れる肌にすべらか。陽に干された証のいい匂いがして、少しの汚れもない。
さすが王族。良いもの使ってるなぁ。
「あんた本当に男相手もいけるんだ」
横たわるオレの腹に跨って服を脱ぐ殿下を見上げる。鍛え上げられた筋肉が露わになり思わず見蕩れてしまった。
「何を今更。抱いてほしいと言ってきたのは貴様の方だろうに」
「いや、オレそんなこと言ってないよ!?　単に恋人っぽいことしたいって言っただけだよ!?」
例えば一緒に食事をしたり、例えば手を繋いで散歩をしたり。ここまで一足跳びな行為に及ぶ事態になるとは予想もしていなかった。
慌てて抗議の声をあげると肩を寝台に強く押し付けられる。
「――最終的に辿り着く先はココだろう。それに私は男に抱かれる趣味は無い」
「オレだって無い！」
趣味!?　本気で言っているなら勘違いも甚だしい。普段の得物は弓だけど、格闘技が不得手というわけじゃない。乗っているのが殿下以外の相手ならとっくに全力で蹴り飛ばして逃げ出している。
「なら止めるか？」
「止めない！　あんたが相手なら女役でも全然いい！　…だいたい、オレは男を抱く趣味はもっと無いんだ」
あまりに素っ気無く言われたせいで逆に本気だとわかり、身体を起こしかけた殿下の服を反射的に掴む。殿下は予想していたようにニヤリと笑った。
「そうか。ならばこれ以降は、泣いて許しを請われても止めないから覚悟しておけ」
「――わぉ」
こういう時に寝台で囁かれるのって普通は甘い睦言のはずじゃないんだろうか。照れ隠しと不器用さを差し引いても、死刑宣告と全く同じ響きをもって聞こえるのはどうしてだろう。
身体が硬直した隙をつくように、服の端から殿下の手のひらが滑り込んでくる。
「ふっ…」
小さな傷にまみれた手はガサガサしていて少しくすぐったい。身を捩ると横を向いた顔を追いかけるように唇を重ねられた。絶妙な加減で耳の裏を撫でられる。口を開くと待っていたように舌が差し入れられる。
「ん……んぅ…」
ねっとりと絡みついてくる舌の動きを楽しんでいたら、いつの間